新制作

SHINSEISAKU

国立新美術館

2018.9.19 - 10.1

Vol.76 / 2018

冬号

新制作協会　広報誌

82nd

《受賞作家展 開催のご案内》

■ 絵画部

2019年1月31日（木）～ 2月8日（金）
11:00 – 18:00
[最終日] 16 : 00 終了
[休廊日] 2月3日（日）
会場：INOAC 銀座並木通りギャラリー
中央区銀座 2-4-14 TEL. 03-5524-5185

● オープニングセレモニー：1/31（木）16:30 – 18:00
● オープニングパーティ：1/31（木）18:00 – 20:00
会場：「えん」銀座店 TEL. 03-3538-5496

■ 彫刻部

2019年2月4日（月）～ 2月15日（金）
11:00 – 18:30
[最終日] 16 : 00 終了
[休廊日] 2月10日（日）、11日（月・祝）
会場：ギャラリーせいほう
中央区銀座8-10-7 TEL. 03-3573-2468

● オープニングパーティ：2/4（月）17:00 – 18:00

■ スペースデザイン部

2019年2月3日（日）～ 2月8日（金）
10:00 – 18:30
[初日] 13 : 00 –　[最終日] 17 : 00 終了
会場：建築会館ギャラリー
港区芝5-26-20 TEL. 03-3456-2051

● オープニングパーティ：2/3（日）16:00 – 18:00

《入場者数》

第82回新制作展の入場者数は、全日程合計45,373人（無料・一般有料入場者合計）でした。

《巡回展日程》

● 新制作展（神戸）
兵庫県立美術館王子分館 原田の森ギャラリー
10/31(水)～11/7(水)　※休館日11/5(月)
最終日は15時まで

《賞 牌》

第82回展新作家賞受賞者に贈られました。

「飛翔」 藤原 郁三
陶、ガラス　10×13.5 ㎝

《新制作 ― 表紙の言葉》

大宇宙は、常に変化して、バランスを取続けています。又、地球上の万物の小宇宙の生命も、バランスを取りながら生長しています。当然私の生命もバランスを取続けて成長しています。

今回、新制作の表紙に使って頂きました私の作品は、2016年（96才）のアライの作品ですが、今ここで、今の私（98才）が客観的に“感じ見る”ことが出来ると云うことは、さまざまな思いが交錯して浮かび上がり、大変嬉しいことです。

これからも、生ある限り、作品を創り続けていきたいと思っていますが、そのときそのとき、アライが、何をどう選ぶのか、又何をどう創るのか、今の私にはわからないことです。総てお任せしています。

（絵画部会員・荒井茂雄）

《新協友》

【絵画部】
阿部 洋子、大崎 静子、岡田 安正、岡本 冨有子、佐藤 芙美、遠山 くこ、中村 葉子、藤田 憲一、吉野 芳子、和木 優周

【彫刻部】
笠井 利彦、河合 睦子、河村 幹夫、多田 裕、牧野 未央

【SD部】
井上 国明、大谷 美智子

《彫刻部シード作家》

受賞者の中から翌年無審査で本展に出品できる作家を選びました。今年は、河合 睦子、広瀬 護、牧野 未央の3氏です。

《第83回新制作展の開催案内》

開催期間：平成31年9月18日(水)～9月30日(月)
搬入受付：平成31年9月4日(水)、9月5日(木)

《伝言板》

● 図録のバックナンバーについて
故・橋本裕臣氏令夫人の民子様より、第1回、第41回、第42回、第47回展の図録をご寄贈いただきました。

《物故会員　展覧会情報》

◆ 川越市立美術館では、故・相原求一朗氏の展覧会「相原求一朗の軌跡 –大地への挑戦– 」が開催されます。
第一部：2018年12月1日（土）－2019年1月27日（日）
第二部：2019年1月31日（木）－3月24日（日）

◆ 10月6日～12月2日の期間、馬の博物館にて故・猪熊弦一郎氏の展覧会「猪熊弦一郎展　馬と女性たち」が開催されます。

《裸子3 顔24 馬8》
1992 年
丸亀市猪熊弦一郎
現代美術館所蔵
© 公益財団法人
ミモカ美術振興財団

編集後記

10年ぶりに会報委員になり改めて広報誌としての役割とは何かと言う問題に直面しました。魅力ある広報誌としてどのような展開がこれから必要なのか、皆様のご意見を参考に、ご期待に答えられるよう試行錯誤しながら良い方向へ繋げていけたらと考えます。
今号に原稿をお寄せ下さった方、ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。　（小島）

訃 報　（平成30年10月31日現在）

新制作協会発展に尽力されました故人を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

高橋 米 氏
彫刻部会員
平成 30 年 3 月 24 日逝去
（享年 87 才）

中村 徳守 氏
絵画部会員
平成 30 年 10 月 9 日逝去
（享年 92 才）

新 制 作 協 会

〒160-0022
東京都新宿区新宿 6-28-10 大阪屋ビル202
Tel：03-6233-7008　Fax：03-6233-7009
URL：http://www.shinseisaku.net/
E-mail：webmaster@shinseisaku.net
発　行 / 新制作協会
企画・編集・制作 / 広報委員会広報誌編集委員
小島 隆三、山口 都、岩間 弘、
本田 悦久、中野 威
監　修 / 佐藤 泰生
発行日 / 2018年12月
表紙絵 / 荒井 茂雄 「よろこび」
2016年、第80回記念新制作展出品作品

＊広報委員会では、新制作展に関わるニュース、伝言、ご批判、ご意見をお待ちしております。お気軽にお寄せください。次号をご希望の方は協会事務所迄ご連絡ください。

SHINSEISAKU

審査陳列報告

■絵画部

木嶋 正吾

今年の夏は猛暑と台風に見舞われ、その影響から絵画部の会員、一般出品者ともに出品が少し減ってしまいました。会員88名の出品は今までにない少なさです。一般出品者総数372名に対して入選者は301名で、入選倍率は多少緩和されたことになりますが、作品は充実した高いレベルで依然として厳選でした。それを裏付けるように2点作家が30名、新作家賞が9名、新会員7名、絵画部賞7名、損保ジャパン興亜美術財団賞1名と受賞者をたくさん輩出しました。尚、初入選も36名でています。最近の入選者で変化してきた事は外国の方が少しずつ増えていることです。数年前は中国、韓国、カンボジアといったアジア圏からでしたが、昨年からドイツ、アメリカといった欧米からの出品で、新鮮な刺激を与えています。

アーティストトーク、アートレクチャー、新会員トークという企画が今年からスタートしました。アーティストトークとは、会員と一般出品者が様々な問題について同じ目線で語り合い理解を深めようとするものです。今年のテーマは、「具象、半抽象、抽象」で、それぞれのグループに分かれて有意義な話し合いが行われ、展示も皆様の協力でテーマに沿ったスッキリしたものにすることができました。アートレクチャーでは林道郎氏の『「メディウム」の行方、その内的複数性について』という講演会が行われ、今後の絵画の行方を占うような興味深い内容で大変な盛況となりました。

最後に、会員でご高齢にもかかわらず元気に出品されている荒井茂雄さんをご紹介させていただきます。先生は1920年生まれの98歳です。今年4月から7月まで香川県の丸亀市猪熊弦一郎現代美術館で個展も開催されていました。旺盛な制作意欲と持続力を、私たちも見習いたいものです。

■彫刻部

長谷川 喜男

第82回展の彫刻部は、搬入者数71名、搬入点数102点でした。昨年度より搬入者数が5名、搬入点数が9点減少しました。特に、若い世代の出品者に減少傾向がありました。この夏の酷暑や搬入時の台風の影響だけではありません。学校教育における美術の授業数の減少により、彫刻制作の体験が減ったことで彫刻人口の減少につながったと考えられます。また、一般出品者は彫刻制作の環境を整え、彫刻を創り続けることの難しさも課題となります。彫刻の魅力を追い続けるために、新制作展を一年間の勉強の成果を発表する場として出品を続けてほしいと思います。

一般審査においては、出席会員の過半数の同意で入選・選外を決定しました。厳正な審査の結果、入選点数58点、入選者数54名、2点入選4名、初入選7名となりました。昨年より、やや厳しい審査結果となりました。入選作は、彫刻として成立する要素を踏まえ、確かな表現の作品も多くありました。しかしながら、メッセージ性が弱い作品もあり、個々の作家の課題の一つになるのではないかと思います。

授賞会議で会員推挙2名、新作家賞8名が決まりました。また、シード作家（来年度無審査）は、新作家賞の中から3名が選ばれました。今後の活躍が期待されます。また、30年近く出品を続けられた作家が、新作家賞を初受賞されました。続けることから、彫刻の新たな魅力をみつけることができることが実証されたと思います。

陳列については、今年度も具象、抽象、素材、大きさなどを考慮し、観やすく展示されました。会場全体の配置には、メリハリとともに拡がりがある充実した空間となり、個々の彫刻が生きる展示となりました。

■スペースデザイン部

尾埜 行男

最初に、本年は台風・豪雨・地震などの大災害が日本各地で起こり、このような状況の中にも拘らず作品を制作し応募された方々に敬意を表したい。

今回の応募は昨年より多少少なく、一般作品44点、ミニアチュール作品49点、計93点であった。9月7日10時、昨年から実施した審査方法〔一部改良して B（保留）を省く〕により各会員に応募作品一覧表（作家名は除外）が渡され、各自が個々に応募作品を巡って、A の入選、C の選外の評価を記入した。そして午前中に提出された評価一覧表は、昼食後集計報告された。ここで改めて全会員で票数及び映像による作品確認を行い、入選・選外を決定した。また、特に選外作品については、会員のコメントを集め、選外搬出で受取りに来た際に本人に直接お伝えする資料とした。

2009年第73回展から始まったミニアチュール部門は今年10回目を迎え応募点数は2倍を超えた。応募者は20代から70代までと幅広く、また様々な身近な素材を駆使して作品作りに励んでいる様子が見受けられた。今回は49点の応募で19点が入選し、入選率38％の狭き門で昨年同様に厳選となった。また展示に際しては、前回の列的展示から、4点のまとまりを1ブロックとしたグループ展示を試みた。他の展示の特徴としては、今回“光”を用いた作品が6点あり、無照明の区画フロアーに程よく配置された。野外展示では、スペースデザイン部の3作品が展示されたが、彫刻部の発案で写真付きの作品配置図を作る事になり、スペースデザイン部にも声が掛かり、一緒に参加させて頂いた。彫刻部・スペースデザイン部の受付入口と、野外通路口に掲示された。

これからも様々な試みをしながら、より丁寧で豊かな展覧会にしたいものである。

企画・展示報告

■絵画部

竹内 一

82回展も無事に終了し、昨年と比べ5000人位入場者が増えました。御高覧頂いた方々、力のこもった作品をご出品して下さった方々に感謝申し上げます。

絵画部の展示のポリシーは「全作品一段掛け（二点入選者を除く）」と「大きさに関わらずしっかりと評価する」という二点を柱にしています。これは言葉にすると当たり前ですが、いざ展示となると様々な問題が生じます。20号位から300号にも及ぶ作品を一堂に会し、一段掛けで収め、一人一人の作品をより良くみせる環境を作る。それを中心に考え壁面や導線、各カテゴリー作品の配置、作品傾向等々多くの作業を経て展示が決まります。今年の展示は如何でしたでしょうか。例年通り、またそれ以上に力作による緊張感を持ちながら、各作品をゆとり持って鑑賞できる空間となったと感じています。

企画行事も大きく変えました。基本として新制作展を「アートを吸収し、発信する」事を目標とし、講演会、様々な角度からのトーク、出品者の作品に焦点を当てたトークなどです。初年度にも関わらず、すべての行事が盛況であったと考えご参加いただいた方々に感謝いたします。

このように、今後も新制作展絵画部は、しっかりとしたポリシーを基本とした展覧会を実施していく中で、改善点を見出し発展させたいと考えます。次回展におきましても、力作のご出品、ご高覧頂けますようお願い申し上げます。

■彫刻部

渡辺 尋志

第82回新制作展彫刻スペースは展示会場全体が見晴らし良く、個々の作品を観賞し易く通路が広くて歩きやすい、などのご感想を頂きました。作品の高低差を考慮に入れた作品配列が良く、また入選作品の数が例年より10点近く少ないことも要因かと思われます。厳正な審査による展示数の減少でもあり、新制作展の変わらぬ精神の表れとご理解頂きたいです。

また、一昨年より規定サイズを見直したためか、新進の出品者には自由な表現、迫力のある大きな作品に挑む方々が多く、見応えのある展示になったと思われます。

そして、本年のオープニングトーク、ギャラリートークは新会員、受賞作家に加えて、遠方から出品している会員の話や言葉も頂き、通常の内容に幅が出ていると思われました。参加するお客様の中にはリピーターが多く、新たに参加される方も着実に増えており、発表する側と観る側の相互理解を高める素晴らしい時間を共有しています。

アートが身近になり気軽に楽しめること、それと作家が観覧者と距離を近づけることがこれからはとても重要なことになっていくと思われます。

■スペースデザイン部

片岡 葉子

2018年度スペースデザイン部の展示は入口近くの左手を暗室（照明作品展示）とし、右手壁面を3室に区切りながらも全体は見通せる配置としました。他に屋外に3作品、休憩室に1作品が展示されました。

今年度の企画としては例年行ってきた作家によるレクチャーは開催せず、9月23日（日）のギャラリートークのみとしました。スペースデザイン部の展示作品は素材、技法ともに多種多様であり作家の素材に対する思い、意識、イメージが作品表現に大きく関係しており鑑賞者のみならず出品者も関心のあるところであり、「素材と表現」に興味を持っていただきたく充実したトークとなることを目指しました。それにより、昨年はどちらかというと会員中心でしたが、今年はできるだけ出品者を中心にということで、受賞者3名を含む約10名の出品者によるご自身の作品についての発表と質疑応答、その後、数名の会員の発表を行いました。1時間半近くのギャラリートークでしたが大勢の方が参加していただき“作者の話を聞くことでより興味、理解が深まった”という声をいただきました。

新制作

猪熊弦一郎と建築部

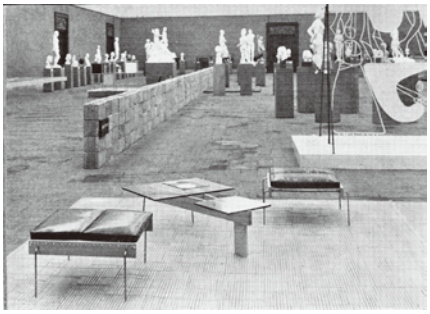
スペースデザイン部会員　片岡 葉子

スペースデザイン部の前身である建築部は1949年に創設されました。

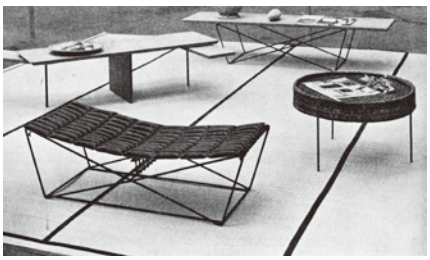
新制作協会創立会員である猪熊弦一郎は画家ですが、壁画制作はもちろん、建築、ポスター、包装紙、家具、テキスタイルなどの様々なデザインをも生活を楽しく豊かにする額縁のない創作活動と考えていて、特に建築には、とてつもなく大きな3次元彫刻として、強く興味を持っていました。戦中の疎開時代からの山口文象氏との交友、1949年の谷口吉郎氏設計の慶応義塾大学学生ホールの壁画「デモクラシー」制作（現存）などをきっかけとして、「われわれの芸術行動は社会生活の中に人間と芸術の有機的なつながりを作り上げていくことであり、そのためには建築家との強い結合が必然的である」との理念をかかげ、総合芸術の一翼として建築部を立ち上げることに至ったのだと思います。

創設時のメンバーは池辺陽、岡田哲郎、谷口吉郎、丹下健三、前川國男、山口文象、吉村順三の7名で、2年後にはインテリアデザイナーの剣持勇氏が参加し、建築図面、模型、家具などが出品されました。第1回の展示では丹下健三氏が会場構成を行い、天井から吊りさげたトラス構造の壁面で会場を区切り、会のマークの形のグリーンの芝生上に彫刻を配置するなどと、戦後間もないこの時期に、大変斬新で画期的な展示がなされました。

1



2



3

猪熊自身はイス、テーブルをはじめ、さまざまな家具を制作し、渡米する1955年まで出品をつづけます。またこの時期の建築とのコラボレーション作品としては名古屋丸栄ホテル壁画「愛の誕生」、上野駅コンコース壁画「自由」（現存）、東京駅八重洲口壁面オブジェ「宇宙」などがあり、「デモクラシー」と「愛の誕生」の制作により第2回毎日美術賞（1950年）を受賞しています。

建築部では山口文象氏のローコスト住宅の実物展示など、実験的な展示も行われましたが、建築模型、図面などがその時代には展覧会としてわかりにくいということもあり、1969年には建築のみではなく、さらに広く空間とかかわる創作をということで、スペースデザイン部と名前を改めます。陶、木工、テキスタイル、照明、ガラスをはじめとする多彩な表現、技法、素材、又、使えるもの、使えないもの、実験的なものなど、立ち位置もさまざまな作品が集まるようになり、今日に至っています。

スペースデザイン部の分野、表現手段などによる垣根の無い発表の場は、どんどん新しい表現の生まれるグローバルな時代にあって、貴重で大きな可能性を持つものと思います。魅力的で力のある作品を呼び込むためには、建築部創設時の理念、情熱を忘れることなく、会員一人一人が意欲的、革新的、個性的な作品を制作していく姿勢を持ち続けることが求められていると思います。

1. 上野駅コンコース壁画「自由」 猪熊1951年制作
2. 第 15 回新制作展　会場風景
　新建築　1951 年 11 月号より（撮影者不明）
3. 第 17 回新制作展　猪熊：家具
　新建築　1953 年 11 月号より（撮影者不明）

4

5

4.「真鍮網による椅子」
　猪熊 1950 年制作
　撮影：高橋章
5.「寝椅子」
　猪熊 1952 年制作
　撮影：高橋章

新制作

小豆島・画家達・「ファウヌスの家」

絵画部会員　宮田 保史

小豆島が歴史上にあらわれたのは「古事記」の中で、応神天皇が小豆島に御遊幸されたことについての記録が残っています。そこには阿豆枳辞摩と記されています。現にその名残りとして寒霞渓の山並みの中で最高峰である星が城に阿豆枳辞摩神社があります。小豆島町西村にあるオリーブ公園の後方にアトリエを移して10数年が過ぎました。オリーブの木々の間にあり、しかも高所ですので、「二十四の瞳」の舞台になった田ノ浦半島が真正面に海を挟んで見渡せます。多分来島された画家達がこの付近で絵を描いたのではないかと想像しています。

昭和30年（1955）頃、作家壷井栄著「二十四の瞳」の映画化で一躍有名になりました。

それ以前、明治43年（1910）財団法人神懸山保勝会の招きで来島した、太平洋画会の小杉未醒（放菴）、満谷國四郎、吉田博、中川八郎、河合新蔵、木下藤次郎、高村眞夫、石井柏亭、鹿子木孟郎、中村不折の10人の画家達は、寒霞渓や島内各地の風物を描き、貴重な資料として今日に伝えています。明治44年（1911）発行の「十人写生旅行」（編纂者小川未醒　発行所興文社）がその一つです。油絵、水彩画、毛筆画、鉛筆淡彩画、ペン画、鉛筆画等の原画を書籍にするために三色版、石版、写真版、写真石版、木版、ジンク版等の技法で80数点と随筆、日誌、書簡の類、70ページその他本書に対する新聞記事を加えた160ページほどの書物、箱入りの想定で仕上げた贅沢で美麗な好著です。

滞在10日余りに描かれた絵などが東京、大阪の新聞紙上を飾り、翌年の文部省の展覧会ではスケッチのみで一室を充たし、小豆島の奇勝妙景を天下に知らしめたと「神懸山志」に記されています。ちなみに太平洋画会は日本最初の洋画団体、明治美術会を浅井忠、黒田清輝らが組織し、中村不折、岡田三郎助を輩出し、明治34年（1901）の解散を承けて設立された会です。

後年、寒霞渓もさることながらオリーブが一躍有名になり、梅田画廊などが力を入れたのではないかと思うのですが、小磯良平、猪熊弦一郎、中西利雄等新制作創立会員をはじめとして、古家新、池田満寿夫らが来島し、島のあちこちを絵にしています。老舗旅館森口屋（最近廃館）には数多の画家が宿代がわりに絵を残していたと聞いています。創立会員の中で専ら不透明水彩画を描き、水彩画の表現に新生面を開拓した中西利雄は「はじめて日本で見るオリーブ樹の淡い美しさになにか南仏地中海辺りで描いているような気がして、絵を描いている間実に楽しかったことを思い出す」と「オリーブ樹のある島」（1936年制作）の作品のコメントを残しています。ちなみに1936年（昭和11年）は新制作派協会結成の年です。

2018年の夏は連日の猛暑、エアコンの必要を痛感させられた夏でした。扇風機の最強でもたまらず、日に何度かはヴェランダの床とガラス戸に水撒きをして凌ぎました。高齢者の方が亡くなられたニュースではほとんど部屋には冷暖房完備が無かったこと、または故障していたと報じられていました。幸いにして高齢者二人の我が家はニュースになるようなことはありませんでした。どうにかこうにか酷暑の中で82回展の作品を仕上げました。

「伊太利亜2018（ファウヌスの家）」はナポリ郊外のポンペイの遺跡群を描いたものです。ポンペイは火山の噴火が時間を止めた古代都市です。2000年以上前のローマ帝政時代紀元9年ヴェズーヴィオ火山の噴火によって火山灰の下に埋もれてしまい、再びポンペイが発見されたのは17世紀になってからです。現在も発掘は続けられています。

「ファウヌスの家」は1830年に発掘されたポンペイで最も大きな邸宅です。ファウヌスの家はその年にポンペイ遺跡を訪ねたゲーテの息子にちなんで「ゲーテの家」という名で呼ばれていました。大きな中庭の中央に家の名称牧神ファウヌスの像（ブロンズ像で模造品）を画面中央左側下方に位置づけ、黒色でやや写実的に表わしています。実像はナポリにある国立考古学博物館に収納されています。

ファウヌスはローマ神話の神々です。森に棲み家畜を守る田園の小神群です。ファウヌスはギリシャ神話の牧神パン同様毛に覆われた臑（すね）と山羊の蹄、尖った耳と角を生やしているのが一般的です。ポンペイのファウヌスは頭部以外は美しい人間の姿形をしています。因みに＜パニック＞と呼ばれる恐慌状態は牧神パンが突然出現することによって引き起こされることですが、語源はパンに由来します。頭部以外人間の姿で表わされているのはポンペイだけですので、題名に記されていなくてもポンペイ遺跡とわかります。広大な遺跡群を背景の山々と森の中に象徴的にしかも白色で記号的に描いたのが今回の作品です。

宮田 保史
「伊太利亜 2018（ファウヌスの家）」

新会員紹介

絵画部

蛭田（ひるた） 美保子（みほこ）

会員の先生方の手厚いご指導のお陰でここまで成長できたので、会員になってもこの感謝を忘れず、制作には真摯に取り組み、日々精進していこうと思います。
これからは会員として、新制作がより良い会になるように、自分に出来る事を少しずつ頑張っていこうと思います。

◆ 1991年 京都府生まれ。
2017年京都市立芸術大学大学院 美術研究科修了。
第80回記念新制作展 80回記念賞受賞。
第81回新制作展 新作家賞受賞。

星（ほし） ゆみ

私は初入選以来、私自身に起きたこと、感じたことを描いてきました。これからもずっとこのテーマで描いていきます。今後皆様に感動を与えられる作品を描いていけるかが大きな宿題となりました。宿題に負けず、一歩一歩進んでいきたいと思います。

◆ 新潟県生まれ。
1994年第58回新制作展 初入選。
1996年上野の森美術館大賞展 入選。
1996年、1998年小磯良平大賞展 入選。
第72回新制作展 新作家賞、第79回絵画部賞受賞。

甲斐（かい） 美奈子（みなこ）

会員にご推挙頂き、心よりお礼を申し上げます。
初出品から10年、先生方の温かいご指導で育てて頂きました。私は香水瓶や花をモチーフにして描いています。
今後も自分の感性を信じ、思考を続けていきたいと思います。

◆ 大阪府生まれ。
2009年京都造形芸術大学通信教育学部卒業。
第73回、第80回記念新制作展 新作家賞受賞。

緒方（おがた） 和美（かずみ）

身が引き締まる思いで一杯です。新制作には他の公募展とは違うプライドと品格、そして出品者に対する優しさがあります。この唯一無二の「新制作ブランド」をこれからも大切にいたします。まだまだ微力ではありますがどうぞよろしくお願い申し上げます。

◆ 東京都生まれ。
女子美術大学卒業。
第79回、第81回新制作展 絵画部賞受賞。
第80回記念新制作展 新作家賞受賞。

桜岡（さくらおか） みゆき

尊敬できる作家が闊歩する新制作の会場は憧れの場所です。出品を始めてからは、制作の甘えを灰汁のように浮き上がらせ、厳しくご指導いただく修練の場になりました。その中で未だ遠くにですが表現の自由を実感しはじめています。自らに最も厳しくしていけたらと思います。よろしくお願い致します。

◆ 1958年東京都生まれ。
1981年女子美術大学洋画科 卒業。
2002年第66回新制作展 初入選。
第75回、第79回新制作展 新作家賞受賞。

小山（こやま） 剛（つよし）

妥協のない作品群の中で、自分の絵を客観的に見、様々なことを学び、自分を鍛える道場の様な場として、新制作展に出品し続けてきました。今回、本当の意味でのスタートラインに立った気持ちです。この緊張感を忘れることなく、挑戦する気持ちを持って、自分に厳しく、そしてのびのびと、一枚一枚の絵に向かっていこうと思います。

◆ 1960年愛知県生まれ。
1986年第50回新制作展 初入選。
1988年和光大学人文学部芸術学科研究生修了。
第81回新制作展 新作家賞受賞。

高野（たかの） 真木子（まきこ）

私にとって新制作は青春そのものです。希望と情熱と夢を胸に、これからもずっと制作していけたら、と考えております。作品制作にあたり、「この作品は、はたして絵画として成立しているか。完全なるオリジナリティーであるか。」という事を念頭において、より良く純度の高い作品をつくるべく精進してまいりたいと思っております。

◆ 東京都生まれ。
1987年 女子美術大学芸術学部洋画専攻卒業。（'88 研究生修了）
1994年 新制作展 初出品（以後毎年）
2009年損保ジャパン美術財団選抜奨励展。
第79回新制作展 新作家賞受賞。

彫刻部

香取（かとり） 宏幸（ひろゆき）

新制作展に出品するたびに、作家の皆様方の作品に圧倒され、自分の弱さを痛感してきました。しかし、それは新しい発見でもあり、次に繋がる挑戦にもなりました。これからも自分が目指す作品への探求と、それに向かって常に挑み続ける強い気持ちを持ちたいと思います。多くのアドバイスを頂いた諸先輩方に心より感謝申し上げます。

◆ 1982年東京都生まれ。
2005年和光大学表現学部 芸術学科卒業。
2006年第70回記念新制作展 初入選。
第79回、第80回記念、第81回新制作展 新作家賞受賞。

田中（たなか） 和之（かずゆき）

学生の頃、新制作と出会いました。隔離されたような重々しい空間に凌ぎ合う様に並んでいる作品たちの力強さに圧倒されたのを覚えています。憧れから始まった初出品でしたが、先生方の温かいご指導のお陰で出品を続けることができました。感謝の気持ちを大切により一層の努力で制作活動に励んでいきたいと思います。

◆ 1977年埼玉県生まれ。
2002年第66回新制作展 初入選。
2003年宝塚造形芸術大学大学院 造形研究科修了。
第77回、第81回新制作展 新作家賞受賞。

── 第８２回新制作展受賞者 ──

［ 新作家賞 ］

■ 絵画部 （９名）

阿部 洋子 / 岡田 安正 / 小山 恵
塩田 志津子 / 武田 雪枝 / 仲田 道子
中村 葉子 / 藤田 憲一 / 渡辺 有葵

■ 彫刻部 （８名）

小口 偉 / 笠井 利彦 / 河合 睦子
河村 幹夫 / 多田 裕 / 原田 理糸
広瀬 護 / 牧野 未央

■ スペースデザイン部 （５名）

五十嵐 史帆 / 井上 国明 / 大谷 美智子
柳田 眞理子 / 横尾 まさこ

［ 絵画部賞 ］（７名）

志賀 律子 / 下倉 剛史 / 塚崎 聖子
能勢 まゆ子 / 村瀬 順子 / 和田 和子
渡邊 啓子

［ 損保ジャパン日本興亜美術財団賞 ］

丸尾 宏一